

シミリーはメタファーの下僕ではない

瀬戸賢一

認知言語学は、比喩の研究をひとつのきっかけとした。しかし、メタファーやメトニミーと比べてシミリーへの関心は、総じて低かった。たとえば、「アキレスは獅子だ」と「アキレスは獅子のようだ」を比べて、前者がメタファー、後者がシミリーとするだけでは、引き締まったメタファーに関心が向くのは当然だろう。「ような」などのマーカーの有無を中心とする考え方では、シミリーの認知的な存在意義はみいだしがたい。

1 メタファーにならないシミリー

そこでまず、「ような」のようなマーカーが省略できないシミリーがふつうに存在することを、事実として確認しよう。ある日「私」は唐突に妻から離婚話をきりだされ、いまキッチンテーブルで向き合っている。

- (1) 彼女は両手をテーブルの上に置き、目の前のコーヒークップの内側を見下ろしていた。その中におみくじでも浮かんでいて、そこに書かれた文句を読み取っているみたいに。（村上春樹『騎士団長殺し 第1部』）

倒置を伴うが「みたいに」がシミリーマーカーであり、このマーカーは省略できない。冒頭のアキレスの例は、明らかに作例であり、シミリーの実態をよく反映するものではなく、また(1)は例外的な表現でもない。

2 シミリーマーカー

では次にマーカーの多様性に目を向けよう。次の一節は芸者駒子の描写である。

- (2) 細く高い鼻は少し寂しいはずだけれども、頬が生き生きと上気しているので、私はここにいますというささやきのように見えた。美しい血の蛭の輪のようになめらかなくちびるは、小さくつぼめた時も、そこに映る光をぬめぬめ動かしているようで、そのくせ唄につれて大きく開いても、また可憐にすぐ縮まるというふうに、彼女のからだの魅力そっくりであった。下がり気味のまゆの下に、目尻が上がりもせず下がりもせず、わざとまっすぐ描いたような目は、どこかおかしいようながら、今はぬれ輝いて、幼なげだった。白粉はなく、都会の水商売で透き通ったところへ、山の色が染めたとでもいう、百合か玉葱みたいな球根をむいた新しさの皮膚は、首までほんのり血の色が上っていて、なによりも清潔だった。

（川端康成『雪国』）

(2)には、重複も含めて延べ10個のシミリー標識が使用されている。これらのほかにもマーカーは多数あり、その数は事実上かぎりなく、なかにはシミリーの合図として気づきにくいものまで含まれるようだ。

3 フルスケールのシミリー、あるいはネタバレ型シミリー

実例から判断して、典型的なシミリーの枠は「AはBのようだCの点で」だと考えられる。これにはバリエーションがあって、「Cの点でAはBのようだ」はそのひとつである。典型例をひとつ示そう。

- (3) 人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱うのはばかばかしい。重大に扱わなければ危険である。

（芥川竜之介『侏儒の言葉』）

シミリーは、新天地を開拓し、新たな類似点の発見を言い表すことに意義をみる。それゆえ、AがBに似ているというだけでは通じないことがよくあり、どの点で似ているのかをCで解き明かすことが必要となる。「人生」がいかに「一箱のマッチ」と類似するかを、Cで解明して、ようやく読者の納得がえられる仕組みである。

4 シミリーとメタファーの力動的関係

他方、冒頭のアキレスの例や、「人生は夢のようだ」「人生は幻の如し」のようなシミリーは、なかば慣用化して、比喩としての緊張感に欠ける。わざわざCの謎解きを加えるまでもない。この点で、これらは形の上ではシミリーだが、比喩としてはメタファーの領域に入っているとさえいえよう。これに対して、次例の下線部は、形はメタファーだが、ふつうのメタファーではない。「私」はいま級友の緑に励まされている。

- (4) 「元気を出そうとはしているんだけど」

「人生はビスケットの缶だと思えばいいよ」

僕は何度か頭を振ってから緑の顔を見た。「たぶん僕の頭がわるいせいだと思うけれど、ときどき君が何を言ってるのかよく理解できないことがある」

「ビスケットの缶にいろんなビスケットがつまって、好きなのとあまり好きじゃないのがあるでしょ？それで先に好きなのどんどん食べちゃうと、あとあまり好きじゃないのばかり残るわよね。私、辛いことがあるといつもそう思うのよ。今これをやっくとあとになって楽になるって。人生はビスケットの缶なんだって」

「まあひとつの哲学ではあるな」

「でもそれ本当よ。私、経験的にそれを学んだもの」と緑は言った。（村上春樹『ノルウェイの森(下)』）

いきなり人生をビスケット缶に喩えられても、聞き手はただ戸惑うばかり。下線部は、むしろ、最初からネタバレ型のシミリーで表現されるのがふさわしかったのではなかろうか。とすると、比喩はおおよそ4種に類別されることになる。①人生は夢のようだ (s_1)、②人生は一箱のマッチのようだ(s_2)、③人生はビスケットの缶だ(m_1)、④人生は旅だ(m_2)。図解すると次のようになる。

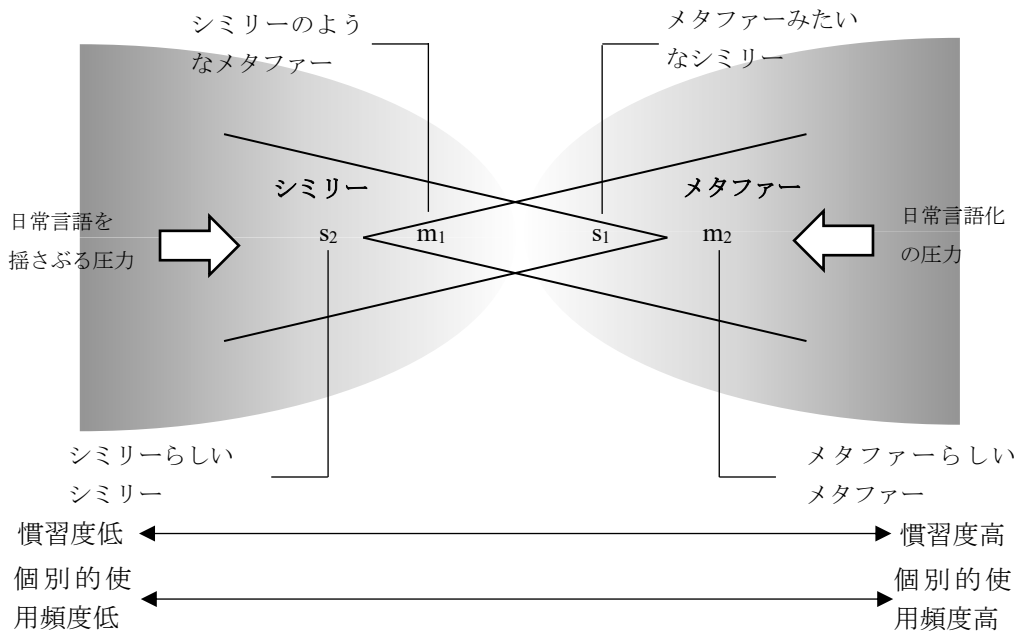


図1 シミリーとメタファーの力動的関係

s_1 はメタファーの領域に嵌入するシミリーである。形のうえではシミリー標識をとまなうのでシミリーだが、意味的にはメタファーに近い。 s_2 はシミリーらしいシミリーである。他方、 m_1 はシミリーの領域に侵入するメタファーである。形式はシミリー標識をとまなわないのでメタファーだが、意味的にはシミリーに近い。ふつうCによる謎解きが必要。でないと比喩として破綻する。 m_2 はメタファーらしいメタファーである。補足すると、右側からは、日常言語化の圧力が加わる。グラデーションがあり、右側へ進めば進むほど、安定した日常言語の勢力圏となる。左側からの力は、日常言語に揺さぶりをかける圧力である。シミリー(らしいシミリー)は、新しいものの見方の提案であり、比較的安定したことばの慣用に変革の楔を打ち込む。

次に図の二つの双方向矢印を説明しよう。ひとつは慣習度に関係する。慣習度は右に高く、左に低い。慣習度は、創造性の裏返しなので、左に行くほど比喩の創造性が高く、右に進むほどそれは低い。もうひとつは個別的使用頻度に関係する。個々の比喩の頻度を表すもので、メタファーそのものの頻度が高くシミリーそのものの頻度が低いことを意味するのではない。個別的使用頻度が低いとは、あるシミリーの事例がおそらく一期一会的だということである。そのようなシミリーが多くあるということである。曇りのない目で見れば、世界は日々新しい。その言語化には新規のシミリーが要請される。シミリーは、メタファー同様に、飾りではない。

シミリーには独自の役割があり、それは、AとBの間に意外な類似点を発見し、それを提案し、よってAの意味(のある側面)を明らかにすることである。そのためAとBは実際にはあまり似ている必要はなく、かけ離れているほうがかえっておもしろい。自由奔放に駆け回るのがシミリーの魅力の核心であり、奇想天外な、前代未聞の比喩がシミリーのプレグラウンドだ。メタファーと対比するなら、シミリーは比喩の新天地開拓を目指し、メタファーはおおむね既知の比喩の維持と深掘りを志向するとまとめられる。

おもな参考文献 佐藤信夫、1978年、『レトリック感覚』、講談社／瀬戸賢一、2024年(予定)、『レトリック探究』、ひつじ書房／瀬戸賢一・宮畑一範・小倉雅明、2022年、『[例解]現代レトリック事典』、大修館書店。